

平成 28 年度第 1 回東京大学医学部教育総合的改革 FD

講師 孫 大輔

6月10日に今年度第1回の医学部教育総合的改革FDを実施した。今回は2000年に文部省特別招聘教授としてハーバード大学から招聘されたThomas S. Inui教授（現インディアナ大学医学部教授）を再度お招きし、特別講演を行っていただく内容とした。テーマは「イヌイ・プロジェクトから15年を経て：東大医学部教育の過去・現在・未来」と題し、2000年時の教育改革プロジェクト「Inui Project」からの15年の東大医学部の歩みを振り返り、評価した上で議論を深める会となった。パネリストとして、本学の医学教育に縁の深い、大滝純司先生（北海道大学）、加我君孝先生（国立病院機構東京医療センター）、黒川清先生（政策研究大学院大学）、高本眞一先生（三井記念病院）、福原俊一先生（京都大学）、松村真司先生（松村医院）をお招きして、パネルディスカッションを行った。学内から24名の教員が参加した。

Inui先生の講演タイトルは「Curriculum Stagnation at Todai School of Medicine - A Sober Analysis（東大医学部教育の停滞-思い込みのない冷静な現状の評価）」というもので、2000年当時のInui Projectの紹介、当時の医学部教育の評価と提言が紹介された。当時の評価は、(1)カリキュラム開発が不十分（コアになる内容について合意がない、講義形式への偏り、短期間で断片的なクリニカルクラークシップ）、(2)学生のプロフェッショナリズム形成の遅れ（自己制御学習習慣の涵養不足、患者への関わりの遅さ、患者ケアへの参加の少なさ、情報過多によるモチベーションの低下）、(3)カリキュラム管理の不足（医学部長の任期が短いこと、不十分な質評価、教育専門家の不足）、(4)教育FDの不足（教育力を身につけるFDの機会とリソースの不足）、などであった。それに対して、当時のInui Working Groupから出された勧告は4つのカテゴリーからなり、(1)組織改革に関する勧告（学部長の任期延長、教育カリキュラム担当の副学部長の設置、医学教育担当専門オフィスの設置）、(2)カリキュラム開発に関する勧告（必須コースのブロックごとの期間の明示、3年/4年次における自己学習時間の確保、必修科目（コア）と選択科目の設置、臨床診断学実習コースの拡充、クリニカルクラークシップのコアの実習を長期間に、クリニカルクラークシップにおける学生の貢献度の拡大、クリニカルクラークシップにおける

学習目標の明確化）、(3)新しい教育手法に関する勧告（基礎と臨床を統合した演習の導入、臨床へのアーリーエクスポージャー、ウェブベースの教育リソースの開発、カリキュラム開発の下部委員会の設置）、(4)教育評価に関する勧告（教育評価の体系的アプローチの確立）、であった。

今回の講演では、Inui先生自ら、2014年に本学がWFME医学教育分野別評価を受審した際の自己点検評価書および外部評価報告書、また、近年のIRCME外国人特任教員のレポートを精読した上で、現状の東大医学部の教育に対するInui先生による評価が発表された。評価基準は、A/B/C/D/Fの5段階であった。結果として、(1)組織改革:D-、(2)カリキュラム開発:D-、(3)新しい教育手法:D-、(4)教育評価:F、と非常に厳しい評価が下された。理由として、カリキュラム全体は15年前と大きく変わっておらず、細切れの講義主体の内容であること、基礎と臨床の統合がほとんど進んでいないこと、学生の自己学習の時間が少なくモチベーションが低下していること、教育評価の体系的なアプローチが欠けていることなどが理由として挙げられた。Inui先生は、この「停滞」がもたらすリスクとして、東京大学の名声の失墜、教員のモチベーションの低下、教育に熱心な教員の喪失、東大卒業生の外部プログラムにおける競争力の低下、などを指摘された。Inui先生の厳しい評価は、裏を返せば、かつて先生がその教育改革に関わった東京大学が「停滞」より立ち直ってほしいという叱咤激励であると思われた。「If you have rich ingredients and the water does not flow, change stops. It smells bad, looks bad. So that's why I used "stagnation" .」（内容物が豊富だったとしても、水が流れなければ、変化は止まる。悪臭がし、見た目も悪くなる。それが「停滞」という言葉を使った理由です）というInui先生の言葉は重く受け止める必要がある。

パネリストの先生方からも多くの意見が出され、議論が交わされた。東京大学の役割としては、学内の教育改革のみならず、日本全体、あるいは世界に新しい教育を発信していくことを目指すべきではないかという意見も出された。今回のFDにおける貴重な議論は、今後の本学医学部の教育改革に確実に活かしていくべきであろう。



▲ パネルディスカッションの様子



▲ 集合写真